

学会印象記

第 15 回国際免疫学会参加印象記

—平成 25 年 8 月 22～27 日：イタリア国ミラノ市—

高橋 秀実

Hidemi TAKAHASHI

日本医科大学微生物学・免疫学教室

平成 25 年 8 月 22～27 日の 6 日間にわたり、イタリア国ミラノ市で第 15 回国際免疫学会が開催された。初日の 8 月 22 日には、現在国際免疫学会の会頭であるマックスプランク研究所の Stefan H.E. Kaufmann 教授の紹介で、一昨年ノーベル医学賞を受賞した Jules Hoffmann 教授の「自然免疫」に関する講演を皮切りに学会が始まった。

HIV に関する免疫のセクションでは、24 日に行われたシンポジウム 11「Viral Infection」において、HIV 研究の第一人者である米国 NIH の Anthony Fauci 博士のもとで「エイズ免疫病態の本態 (HIV Pathogenesis)」に関する多くの研究をされた Guiseppe Pantaleo 博士による「Role of T follicular helper cells in HIV infection」と「HIV 感染者におけるキラー T 細胞 (cytotoxic T lymphocytes) の意義」に関する報告を世界に先駆けて報告したハーバード大学の Bruce D. Walker 教授による「T cell control of HIV」の 2 演題が発表された。Pantaleo 博士は「HIV 感染病態形成における自然免疫の重要性」を、Walker 教授は「HIV 制御における細胞性免疫」について発表するとともにより早期からの HAART 治療が体内の免疫システム破壊を防ぐことを力説されていた。

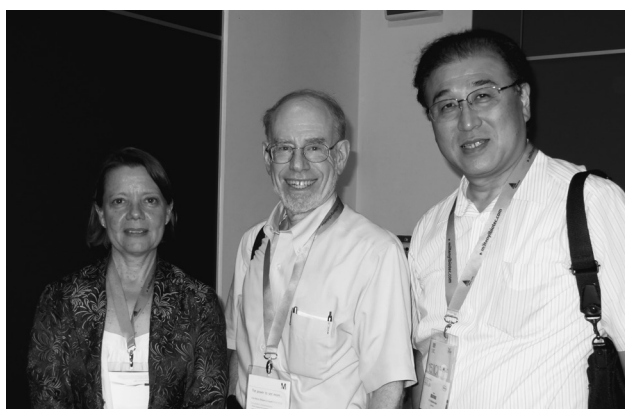
翌 25 日のワークショップ 4 (HIV pathogenesis and immunity) では、司会者の Guido Poli が HAART 治療後に出現した R5-type ウイルスの蔓延化に対し、「The fight between

HIV infection and macrophage polarization」というタイトルで講演をした後、HAART 治療中患者の粘膜組織における R5-type HIV の主たる感染細胞は CD4 陽性の natural killer T (NKT) 細胞である可能性を示した私どもの教室の松村らの知見に基づき、教室の近江が「Inhibition of R5-HIV-1 replication in CD4+ NKT cells by $\gamma\delta$ T lymphocytes」というタイトルで、R5-type HIV-1 の NKT 細胞内での増殖制御を担うのが $\gamma\delta$ T 細胞、特にその亜群である HIV-1 侵入部位である粘膜組織に多数局在する V γ 1V δ 1 型の $\gamma\delta$ T 細胞であるとの口頭発表を行い注目を集めた。本セッションのなかでも繰り返されたことであるが、現在の HAART 治療に加え、今後は粘膜組織における HIV の動態解析ならびに粘膜免疫システム活性化による HIV 制御法の開発がより注目を集めることになるものと考えられる。

以上に加え、26 日のワークショップ 6 (Mucosal vaccine) では、IL-13 遺伝子を組み込んだ粘膜ワクチンの感染防御効果など HIV に対する新奇ワクチン開発の現況が紹介された。そして最終日 27 日にはランチョンセミナーとして、細胞性免疫による HIV 研究の第一人者である英国オックスフォード大学の Andrew McMichael 教授より、「A dance of death: HIV-1 and immunodominant T cells」というタイトルでの免疫システムと HIV-1 との相互作用に関する興味深い話題が提供された。

また写真に示すように、米国留学中に指導を受けた National Cancer Institute のワクチン開発部門長を務める Jay A. Berzofsky 博士や、留学中に一緒に HIV 研究に取り組み、母国フランスに帰国後 HIV と樹状細胞との関係を追跡し、現在はヨーロッパ免疫学会会頭を務めるバスツール大学の Anne Hosmalin 教授と再会し、旧交を温めることができた。

その他、ミラノ市内にあるサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会内のダヴィンチの壁画である「最後の晩餐」を鑑賞することや、フィレンツェにおもむき、シンボルである巨大なドゥオモと呼ばれる教会やウフィツィ美術館において、ボッティチェリの「ヴィーナスの誕生」など以前美術の教科書で見たような信じられないほど多くの絵画や彫刻などのルネッサンス美術を堪能することができ、たいへん実り多い学会参加であった。



(左) Anne Hosmalin 教授, (中央) Jay A. Berzofsky 博士,
(右) 筆者。